

本時のポイント	ラーニングスキルを基に、叙述と叙述、場面と場面のつながりを確認し、これからの読書活動で活用できる読みの力を育てる指導の工夫
---------	---

※ラーニングスキルとは、学習した読み方をまとめたもので、児童が学習を振り返ったり、学習のヒントにしたりして活用するものである。

1 単元名 自分でえらんだ世界の民話のしょうかいカードを作ろう

教材名 スーホの白い馬

2 単元について

(1) 児童の実態

(調査日 平成*年*月*日 調査人数 **人)

調査内容	児童の実態			
(1) 叙述から登場人物の気持ちを想像する問題	正答	**人	誤答	*人
(2) 登場人物の気持ちを表している叙述を抜き出す問題	正答	**人	誤答	**人

本学級の児童は、読書活動を好み、たくさんの本を楽しみながら読んでいるため、登場人物の行動描写や会話文から、想像を広げながら読むことができるようになってきている。

上記調査(1)は、叙述前後に解答に結び付く語句があり、(2)は、文中に解答に直結する語句が書かれているものの、どこにそれが当てはまるのかを考えるものである。その結果、登場人物の行動や会話文から想像を広げて読む力について課題が見られる児童もおり、本単元において底上げを図りたいと考えた。

(2) 教材観

小学校学習指導要領解説国語編によると、第1・2学年の「C 読むこと」の目標は、「書かれている事柄の順序や場面の様子などに気付いたり、想像を広げたりしながら読む能力を身に付けさせるとともに、楽しんで読書しようとする態度を育てる。」である。本教材は、指導事項の「ウ 場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと」を学習する本学年最後の単元である。また、本単元の学習を通して、「オ 文章の内容と自分の経験とを結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合うこと」や「カ 楽しんだり知識を得たりするために、本や文章を選んで読むこと」の実現も目指している。

これまで文学的な文章においては、場面展開が明確な本や文章で、場面の様子を押しえながら想像を広げて読むことをねらいとして、第1学年では「おおきなかぶ」、「くじらぐも」、「だってだっておばあさん」などを学習してきた。

第2学年でも「ふきのとう」、「スイミー」、「ミリーのすてきなぼうし」、「お手紙」と、場面の様子や登場人物の行動や会話、様子に着目し、想像を広げながら読むことを学習してきた。また、読書に親しみ、読書を通して生活を豊かにすることを目指し、並行読書に取り組んだり、読み聞かせを楽しんだりして、多くの作品に触れられるようにしてきた。

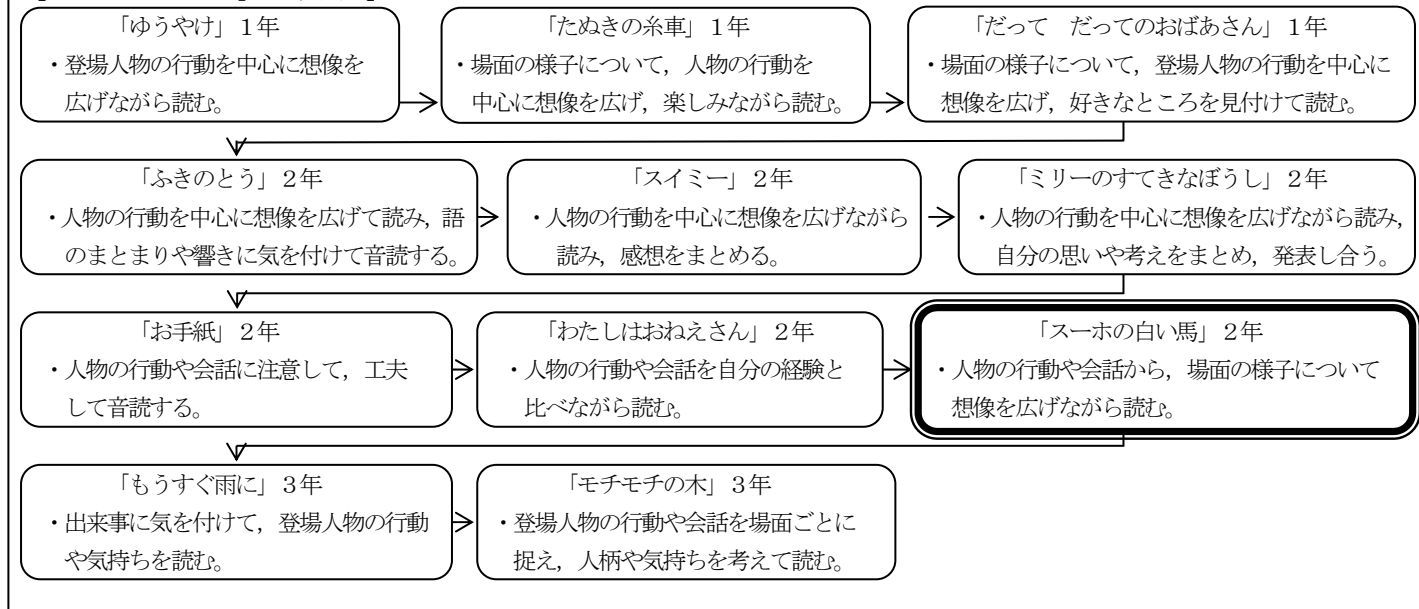
本教材「スーホの白い馬」は、第2学年の文学的文章の学習のまとめにふさわしく、今まで学習してきた作品よりも長文である。そして、文章全体の外枠として「前書き」「結び」があり、馬頭琴の「由来・いわれ話」の体をなしていることや、「設定」「結末」部分がしっかりと書かれているといった特徴があり、多様な価値をもった教材といえる。これは「スイミー」に結末がなく、「ミリーのすてきなぼうし」と「お手紙」に設定がないことと対照的である。

また、それぞれの場面の人物の行動や会話、様子から心情へと想像を広げやすいことも大きな特徴といえる。それは、心情を読み取る基となる叙述として、「直接的な心情表現」、「会話文」、「行動描写」、「様子を表す描写」が長文の中に散りばめられており、それを、丁寧に整理、確認し、中学年の文学的文章の学習へとつなげていきたい。

この作品は、モンゴルの大草原を舞台に、貧しくとも、たくましく心優しいスーホと、スーホに助けられ愛情込めて育てられた白馬との心の交流と固い絆をテーマとし、悲しくも美しい印象を残す物語である。場面が移り変わり、さまざまな出来事が次々と起こっていく話の展開のはやさや、その中でスーホと白馬がどんどん結び付きを深め、白馬の死という悲しい別れの後もなお、心の中で寄り添っていくという心の内面に入り込む内容の深さは、児童にとって初めてといえる内容の教材である。それだけに、強く心に残る読書体験となると考えられる。

読み味をわかせたい内容の中心は、まず、物語の土台となるスーホの人物像である。スーホの人物像を基点として、さまざまな様子や言動の意味や理由が見えてくる。叙述と叙述、場面と場面のつながりが、そこから確認できる。次に、作品のテーマでもあるスーホと白馬の結び付き・絆の強さである。スーホと白馬の関係を打ち破る者として出てくる殿様の言動と、それに対するスーホや白馬の言動を対比的に捉えることで、白馬を思うスーホの気持ちとスーホを思う白馬の気持ちの強さがより感じられるであろう。中心人物であるスーホだけに着目していただだけでは、捉えきれないのである。以前学習した「ミリーのすてきなぼうし」や「お手紙」と同じように、中心人物の周りにはいる人物の言動や気持ちにも目を向けたり、対比的に捉えたりして、人物同士の関係性の中で心情を理解する読み方も確認していきたい。

【「身に付けたい力」の系統図】



(3) 指導観

本単元の言語活動として、「自分で選んだ民話の紹介カードを作って、読書の輪を広げる」ことを設定した。他学年の児童に向け、あらすじ、自分が心に残ったところ、お話クイズなどが書かれたカードを紹介し、読書の輪を広げる活動を行う。どうしたら、紹介カードを手にした人が、その民話を読んでみようと思ってくれるかという視点で、カード作りを行う。

そのため、並行読書で世界の民話に数多く触れさせるために、単元が始まる前から教室に民話コーナーと読書チェック表を設置し、多くの民話を読むための時間を確保する。そして、読んだ中から、単元の始めに、紹介したい民話を一冊選ばせ、紹介カードを作るために、教材「スーホの白い馬」において学習した視点で民話をじっくり読むことへと移行していきたい。

まず、導入として、担任が言語活動のグッドモデルを提示する。紹介カードには、あらすじと心に残ったところだけを書いておき、余白のあるカードにする。そして、余白にはどんなものを書くと、読んだ人が本を読みたいと思ってくれるかを児童と検討しながら、決めていくことを伝える。また、紹介カードは学習センターにコーナーを設置してもらい、他学年の児童に読んでもらうことも伝えることで、「自分も考えて、作ってみたい」という活動の意欲と、「民話をたくさん読んでみたい」という読書活動の意欲も高めていきたい。

次に、追究では、本教材が第2学年最後の文学的文章であり、中学年へとつなげる学習になるよう、今まで学習してきた読みの視点を、ラーニングスキルで振り返ったり、確認したりしながら定着させ、読みの力を高めていきたい。そのために、「どうして馬頭琴ができたのか」、「スーホと白馬の結び付きの深まりと強さ」を単元の中心課題として、本教材を読み深めていく。そして、登場人物の土台となる設定部分の重要性、会話、行動、様子を表す叙述がつながっていることに改めて気付かせ、これから自分が選んだ民話を読み深めるための視点とさせたい。選んだ民話の紹介カードを作成するにあたり、3人構成のグループでの学び合いの場を設定し、お互いの民話はどれも読み合い、内容を把握した上で進めていく。

最後に、まとめとして、自分が選んだ民話の紹介カードをクラス内で読み合い、アドバイスや感想を伝え合う活動を行った上で、図書室に紹介の場を設定する。読んだ児童から感想がもらえるようにし、自分が紹介した本を読んでもらえた喜びも味わわせたい。

3 単元の指導目標

自分が選んだ民話を紹介するために、中心となる登場人物の行動や様子、会話文、挿絵などから、登場人物の気持ちを把握し、想像を広げながら、場面や叙述のつながりを意識して読むことができる。また、どのように紹介すれば、他の人が、自分の選んだ民話を読んでくれるかを考えながら、紹介カードを作成することができる。

4 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度①	読む能力②	言語についての知識・理解・技能③
ア 選んだ民話を紹介するために、教材文を読もうとしている。 イ 自分が選んだ民話について、相手が読みたくなるような紹介カードを書こうとしている。	ア 場面の様子について、登場人物の行動や会話、様子から心情へと想像を広げながら読んでいる。 イ 叙述のつながりを意識したり、つながりを見付けようとしたりしながら読んでいる。	ア 複合語の語幹や意味の違いに気付き、気を付けながら読んでいます。

5 単元の指導計画 (全14時間)

階	欄	ねらい・学習活動	指導上の留意点と評価規準◎ (評価方法)
導入	1	① 単元の目標と教師による「民話紹介」を聞き、学習の見通しをもつ。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習のゴールを見せ、そこに向かって学習を進めるという見通しと意欲をもてるようにする。 ・紹介カードの一部を白紙にしておき、そこに何を書くと、「その民話を読んでみよう。」「読んでみたい。」と思ってもらえるか、みんなで考えて決めることを伝える。
		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">自分でえらんだ世かいのみん話のしょうかいカードを作ろう</div> ② 自分が紹介したい民話を選ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> ・並行読書で、世界の民話の読書コーナーとチェック表を活用し、読書活動に意欲的に取り組めるようにする。 ・本学年最後の文学的文章の学習になるため、これまでの学習をラーニングスキルを使って、振り返りながら、学習計画を立てていく。 ◎自分が選んだ民話について、相手が読みたくなるような紹介カードを書こうとしている。(①イ：観察)
追究	2	③ 「スーホの白い馬」の範読を聞き、初読の感想を書く。 ④ その感想からと最終ゴールに向け、学習の見通しを持ち、学習計画を立てる。	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の実態をしっかりとつかむため、挿絵のない教材文で範読を聞く。 ・初読の感想が、学習していく過程でどのように変化したのか気付くようにするため、しっかりと書くよう伝える。 ◎選んだ民話を紹介するために、教材文を読もうとしている。(①ア：観察)
	3 4	⑤ 場面の移り変わりを確認する。 ⑥ 「前書き」部分から、作品全体を通して、どうして馬頭琴ができたのかということを読み解いていくこと、その由来話になっていることをつかむ。	並行読書に取り組む。選んだ民話の紹介カード作成に取り組む。 <ul style="list-style-type: none"> ・話の全体を捉えるため、出来事の数を数え、大体の場面分けをする。 ・「時を表す言葉」に着目すると、はっきりとした場面の移り変わりが分かることを確認する。 ・挿絵入りの教材文を配り、中心人物はスーホであることを確認する。 ・「いったい、どうして、こういうがっきができたのでしょうか。」「それには、こんな話があるのです。」という文から、馬頭琴の由来話であることが分かり、そのことについて読み解いていくことを押さえる。 ◎選んだ民話を紹介するために、教材文を読もうとしている。(①ア：プリント・発言)
	5	⑦ スーホの人物像、モンゴルの暮らしを確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・作品の土台となる「設定」部分を、叙述から丁寧に確認していく。 ◎選んだ民話を紹介するために、教材文を読もうとしている。(①ア：プリント・発言)
	6	⑧ スーホと白馬の出会いから、白馬が羊をおおかみから守る場面までを読み取る。	<ul style="list-style-type: none"> ・白馬の様子、スーホの言動、二人の関係性を中心に叙述を基に確認していく。特に「これから先、どんなときでも、ぼくはおまえといっしょだよ。」のスーホの言葉は、物語の重要な言葉なので、しっかりと押さえる。 ・ここまでのところで、心に残ったところとその理由を書かせる。 ◎場面の様子について、登場人物の行動や会話、様子から心情へと想像を広げながら読んでいます。(②ア：ノート・発言)

	<p>7 ⑨ 競馬に出たことで、白馬を殿様に捕られてしまう場面を読み取る。</p> <p>8 ⑩ 殿様の所から逃げ出し、スーホの元へと帰ってきた白馬の場面を読み取る。</p> <p>9 本時 ⑪ スーホが馬頭琴を作る場面を読み取る。</p> <p>10 ⑫ 最後の馬頭琴を演奏している場面を読み取る。</p> <p>11 ⑬ あらすじを書く。 ⑭ これまでの感想を振り返り、最後の感想を書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・スーホと殿様の言動を比べながら読み、白馬に対するスーホの強い思いを捉える。 ◎場面の様子について、登場人物の行動や会話、様子から心情へと想像を広げながら読んでいる。(②ア：ノート・発言) ◎複合語の語幹や意味の違いに気付き、気を付けながら読むことができる。(③ア：発言) ・命をかけてスーホの元へ向かう白馬と、白馬の死を見守るスーホの姿を重ねながら読むことで、互いを思い合う強い気持ちを捉える。 ◎場面の様子について、登場人物の行動や会話、様子から心情へと想像を広げながら読んでいる。(②ア：ノート・発言) ◎叙述のつながりを意識したり、つながりを見付けようとしながら読んでいる。(②イ：ノート・発言) ・なぜ白馬は夢に出てきたのか、どうして楽器だったのかを捉える。 ・本時の心に残ったところとその理由を書かせる。 ◎叙述の繋がりを意識したり、繋がりを見付けようとしながら読んでいる。(②イ：ノート・発言) ・馬頭琴を作った後のスーホの様子や思いから、スーホの白馬への思いが、死んでしまった後もずっと変わっていないことを捉える。 ・スーホの白馬に対する「一緒にいる」という意味が、話の始めと終わりで変化していることを押さえる。また、変化のきっかけになった出来事を捉える。 ◎場面の様子について、登場人物の行動や会話、様子から心情へと想像を広げながら読んでいる。(②ア：ノート・発言) ・ラーニングスキルの「あらすじのまとめ方」を確認し、スーホの白い馬のあらすじを書く。 ・初読の感想と読み比べ、自分自身の読みが深まったことに気付くようにする。 ◎選んだ民話を紹介するために、教材文を読もうとしている。(①ア：ノート・観察)
<p>まとめ</p>	<p>12 ⑮ 自分が選んで読んだ民話の紹介カードの作成を、グループで交流しながら進めていく。</p> <p>14 ⑯ 前時までに作った紹介カードをクラス全体で交流する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・前時までのあらすじと心に残ったところをカードにまとめていく。その中であらすじも全て書いてしまうと、カードを手にした人が読まずに済んでしまうことに気付かせ、相手や目的に応じて、書く必要性についても理解できるようにする。 ・友達の紹介カードを読み、どうすればカードを読んだ人が、民話を読みたくなるかを考え、アドバイスしたり、聞いたりすることができるようにする。 ◎場面の様子について、登場人物の行動や会話、様子などから、想像を広げながら読んでいる。(②ア：カード) ◎叙述のつながりを意識したり、つながりを見付けようとしながら読んでいる。(②イ：カード) ◎自分が選んだ民話について、相手が読みたくなるような紹介カードを書こうとしている。(①イ：観察・カード) ◎自分が選んだ民話について、相手が読みたくなるような紹介カードを書こうとしている。(①イ：発言・振り返り) ・友達のカードを見て回り、感想を簡単なカードに記入し、交流する。 ◎場面の様子について、登場人物の行動や会話、様子などから、想像を広げながら読んでいる。(②ア：カード)

6 本時の学習

(1) 本時の目標

◎ 叙述や場面のつながりを意識したり，つながりを見付けたりしながら読むことができる。(②ウ)

(2) 準備・資料

・課題掲示用紙 ・全文掲示物 ・挿絵 ・発表ボード， マーカー ・国語ファイル

(3) 本時の展開 PW：パーソナルワーク GW：グループワーク CW：クラスワーク

	学習課題・学習活動	指導の手立て	◎評価規準 (評価方法) 学習態度の観点 ☆ラーニングスキル
つかむ 4分	1 本時の学習課題と学習の進め方を確認する。 なぜ白馬はスーホのゆめに出てきたのだろう。	<ul style="list-style-type: none"> 前時までの流れを全文掲示を活用して，振り返る。 本時の学習のところを音読させる。 本時の学習の進め方や目的を全体で確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習計画やこれまでの学習内容と本時の学習の流れについて，掲示資料を基に確認している。
考える 7分	2 スーホの夢に白馬が出てきたわけを叙述から考える。(PW)	<ul style="list-style-type: none"> どの叙述からそう思ったのか，説明できるようにプリントに線を引くよう伝える。 叙述をじっくり読み取り，そこから想像して考えていけるよう支援する。 机間指導をし，書けていない児童には，ラーニングスキルをヒントにするよう助言し，個別に支援する。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆ラーニングスキルI-②Aを活用しながら，「なぜ」が出てきたときの読みのヒントを確認している。 根拠となる叙述を見付け出している。 場面と場面，叙述と叙述のつながりを意識して，根拠となる部分を探している。
深める 21分	3 白馬がスーホの夢に出てきたわけを交流する。 (1) 考えを交流し，確認する。(CW) 目指す児童の言葉の例 <ul style="list-style-type: none"> 白馬がスーホに会いたかったから。 スーホが白馬に会いたいと思っていたから。 スーホのことを励まそうと思ったから。 スーホとの約束「ずっといっしょ」をまもりたかったから。 (2) グループで新たな課題を話し合う。(GW) なぜ，楽器だったのだろう。 (3) グループで出た意見を交流する。(CW) 予想される児童の言葉の例 <ul style="list-style-type: none"> スーホは，歌が上手いから。 ずっと一緒にいられるから。 歌うときに一緒に歌えるから。 一日の終わりには，いつも歌を歌っているのを知ってたから。 	<ul style="list-style-type: none"> 「どうしてそう思ったのか」という根拠の部分をかきちんと説明するよう促す。 新たな考えがもてるように，友達の意見を聞くよう促す。 友達の意見を自分の言葉でも説明ができるか，ペアで確認する。 賛成・反対・付け足しなど積極的に意見をつなげて交流し，よりよい考えを生みだし，クラスで確認していけるように支援する。 CWで確認した読み方を活用して，考えるよう促す。 根拠となる叙述に線を引くよう伝える。 積極的に意見をつなげて交流し，考えを出すように伝える。 物語最初の「設定」部分が，物語に大きく関わることを確認する。 物語はいろいろなところでつながっていることを押さえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎叙述のつながりを意識したり，つながりを見付けようとしたりしながら読んでいます。(②ウ：ノート・発言) 友達の意見と自分の考えを比較しながら聞いている。 友達の意見をヒントに，新たな考えがもてるように聞いている。 ◎叙述のつながりを意識したり，つながりを見付けようとしたりしながら読んでいます。(②ウ：発言)

<p>確かめる ・振り返る 13分</p>	<p>4 本時の振り返りから、学習のまとめをする。</p> <div style="border: 2px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>目指す児童の言葉の例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「なぜだろう」と思ったり、考えたりするときは、前にもどってみると分かることに気が付いた。 ・お話はぜんぶつながっていることが分かった。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習課題と学習内容を振り返り、本時に分かったことを書くよう伝える。 ・机間指導し、書けない児童に対しては、本時のめあてを再確認させ、そこから本時で分かったことを自分の言葉で書けるように助言する。 ・本時の学習課題に沿って、振り返りがまとめられているものを提示し、本時のまとめとする。 ・本時に学んだ「場面や叙述のつながりを見付ける読み方」を並行読書でも生かして読んでみるよう伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習課題と学習内容から、本時の振り返りが書けている。 ☆ラーニングスキルⅠ－②Aを参考に にする。 ・時間を意識して、振り返りをまとめている。
-------------------------------	---	--	--

※ ラーニングスキルⅠ－②Aは、添付資料をご覧ください。

③ 場面どうしのつながりを読む力 (低：場面のようす、中：場面の移り変わり) なぜ? どうして? と思うところが出てきたら、前にもどって読んでみるとそのこたえが分かることがあります。

☆ なんでかな? と思うところがあったら、立ちどまって、前にもどって読みかえてみよう。こたえが見つかることがあります。

【例文で考えよう】「スイミー」

● スイミーはかんがえた。いろいろかんがえた。うんとかんがえた。 (四の場面) ↑なぜ?

● 小さな魚のきょうだいたちをまもれなかったから (一の場面)、こんどこそまもりたい、とスイミーは思ったから。
 ● 小さな魚のきょうだいたちがたべられて、とてもかなしい思いをした。 (二の場面) もう二どとあんな思いをしたくなかったから。
 ● じぶんが元気をとりもどした、はじめて見たすばらしいもの・おもしろいもの (三の場面) を小さな赤い魚たちに、見せてあげたいと思ったから。

☆ スイミーがしんけんになって考えたわけが、前の場面にあるんだね!

● スイミーは教えた。けっして、はなればなれにならないこと。みんな、もちばをまもること。 (五の場面) ↑なぜ?

● 見たこともない魚たち。見えない糸でひっぱられている。 (二の場面) このようすを見たから、思いついたさくせん。

☆ スイミーが思いついたさくせんは、二の場面で見ることがヒントになっているのかもしれないね!

モデル文 ぶん

「スイミー」

① 「グループワーク」の段階 だんかい (発言例 はつげんれい)

・スイミーは、じぶんのきょうだいそつくりの魚 さかなたちとあそびたかったから、うんと かんが考えたんだ かんがと思います。

・二の場面 ぼめんできょうだいたちがたべられて、とてもかなしい思いをしたから、もう二どとそんな思 かんがいをしたくないから、うんと かんが考えたんだ かんがと思います。

・すばらしいものをはじめて見て、すぐく かんがかんどうしたから、小さな魚 さかなたちに見せてあげたいと思 かんがったから、うんと かんが考えたんだ かんがと思います。

まとめる段階 だんかい (ノート例 れい)

・なぜ? かんがと思 かんがったところを かんが考えるときは、前 まえの場面 まへにヒントがある まへことが分 まへかりました。前 まえにもどって まへみる まへことが大事 だいじだと分 まへかりました。お話 まへはつな まへが まへつ まへている まへことが分 まへかりました。

② 振り返りの場面 ふりかえり

・お話 まへはつな まへが まへつ まへている まへから、どう まへして まへかな? まへと思 まへった まへときは、前 まえにもど まえって まえヒント まへを まへさが まへし まへて まへみると まへよい まへことが まへ分 まへかり まへました。 まへこれ まへから まへは、 まへそ まへんな まへふう まへに まへ本 まへを まへ読 まへんで まへみ まへよう まへと思 まへいます。